
忘れモノ屋

棗 祥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れモノ屋

【Nコード】

N9914C

【作者名】

棗 祥

【あらすじ】

何かお忘れモノはございませんか？ありましたら一緒に探しましょう。意外な所に…ほら。隠れているかもしれませんから…ね？

0：忘れモノ屋 開店（前書き）

この小説はファンタジーっぽいですが、少し現実味のある文なので、
どうぞお立ち寄り下さいね…。

0：忘れモノ屋 開店

それは、本当に探している時にだけ表れる。
突如として表れる。

用がなくなれば姿を消す。
その名は、

《忘れモノ屋》

そう。例えば、無くなったモノをそのお店に行って取り戻せたり
するわけです。

便利ですよね。

でも、ただそれだけじゃない。
それが《忘れモノ屋》。

「いらっしやいませ。何をお探しに？」

0：忘れモノ屋 開店（後書き）

これからどんどん書いていきます！

1 - 1 : 香菜子

朝。今日も朝が来た。何で朝なんか来るの？いやだ…。学校なんか行きたくないよ…。

「香菜子！早く起きて学校に行きなさい！聞いているの！？香菜子！」

ウルサイ…！

「わかってるよ！」

ふてくされながら、起きて学校に行く支度をする。行きたくないのに。

「行つてきます…。」

寒い…

どんどん冷えこんでくなあ…。

ドン…！

「おはよ！」

「美佳！ビックリしたあ…。おはよ。」

「どうしたの？元気ないじゃん？」

「うん…。まあね。何か学校行くの面倒で…。つまんないって言うかさ…。」

「あゝ。わかるわかる！でもさ！うちがいるじゃん！頑張ってこよう！」

「うん…」

私は美佳の言葉に支えられてなんとか学校に行った。

「…？あれ？」

教科書が…ない？

ロッカーにしまったっけ？

…

ない…

どこに行った？？

…

とりあえず、ないから借りに行かないと。

その時間は他のクラスに教科書を借りた。

「あれ？？」

今度は消しゴム？！

少し小さめで丸いから転がったのかな？

…

ない…

何でないの？！

そんなことが、ずっと続くのです。

そして…

途方にくれていた時、ふと顔を上げるとそこには…

なぜか、商店街の一角に古い小さな小屋みたいなものが建っていました…

ここは確か、空き地だったのに…

最近建ったのかなあ…でも、そしたら綺麗なはず…お世辞にも綺麗とは言えないし。

よく見ると屋根のすぐ下の所に看板がある。なんて書いてあるんだ？

《忘れモノ屋》

どういった意味だろ…

何か興味深いな

入ってみよ！

そして香菜子はその小屋のようなお店に引き込まれるかのように入っていったのです。

1 - 2 : お店の中

中は見た目よりも物凄く広かった。しかし人気の無さに少し恐怖を感じた。

あたりを見渡すと、変な読めない文字で書かれた本や、小さいモノから大きいモノまで色々な色の玉らしきものが棚から溢れかえっていた。

お店：だよね？

そういえば、入ったのはいいけど、もしかしたらタダの民家かもしれない！

やばいな…。帰るか…。

すると、突然奥の暗がりによく見えない所から、

カタッ

だ、誰がいる？

カッ カッ カッ カッ カッ カッ

近づいて

くる音がする…

怖い… 誰なの？人？

するといきなり、

「ワン！ー！！」

「わあー！！！！！！！！！！」

……………。 って犬かい！！！！

綺麗な真っ白なゴールデンレトリバー…可愛い…。あれ…？この犬片目が…ガラスで出来てる…？？

「^{キナコ}綺麗湖？どうしましたか？」

高めのテノールの声が小屋中に響いた。人がいたらしい。階段からゆっくり降りてくる。

「あ、あの。すいません。お邪魔してます。」

彼は、綺麗だった。すべてが。言葉には出来ないほどの何かオーラを感じた。

そして…何か物悲しくほっそりと微笑む人だった。

「いえいえ。お客様でしたか。…いらっしやいませ。何をお探しに？」

「あ…、いえ特に何もありません。ただ珍しくてつい…。」

「そうでしたか。しかしおかしいですね。このお店はお客様以外には姿が見えないはずなのですが…。変ですね？」

「…。そんな仕組みどうやったら出来るんですか？」

「企業秘密です。」

彼はにっこりと答えた。

あやしい…。

「あの…すいません。そろそろ帰ります。お邪魔しました。」

「おや。帰られるのですか？…。そうです。最近あなたの身の回りで無くなったものはございませんか？」

「え…。どうしてそれを？」

「お預かり…してますよ。」

「え？」

1 - 3 : 水晶玉

「そうは言っても映像だけですが。」

「どうゆうことなんですか？」

すると彼は、水晶玉がぎっしりつまった棚の角から小さな水晶玉を取り出し、私の前に差し出した。

「…これが何なんですか？」

「覗いてみて下さればわかりますよ。」

彼はほっそり微笑んだ。私は不審な目でとりあえず言われた通りに覗いてみることにした。綺麗…だけど少し濁った色…紫に茶色って感じがしら…。?!いきなり違う色に変わって…これは…。私？それと…美佳だ…。今日の朝のホームルーム終わった休み時間の時の映像だ…。

「美佳…。トイレ行くー!」

「一人で行きなよ…。今忙しいの!」

「ケチ」

そう。それで私、一人でトイレに行ったんだよね…。

「てかさ…。香菜子ウザい。いつもうちにばかり頼ってくるしさあ…。いい加減ウザいんだよね…。」

「やめなよ美佳」。戻って来ちゃうよ。でも、さっきの振りかたウケる。どこが忙しいんだよ美佳…!」

「だってめんどいじゃん!トイレぐらい一人で行けないわけって感じ!そうだ!何かあいつの持ち物隠して、頼ってくるか試そうよ!そんで賭しよう!」

「いいね!うち頼る方に百円!」

「ずるい!うちも頼る方に千円!」

「それじゃあ、頼らない方がいないじゃん！」
アハハハハ……

「……………」

「ね〜！美佳〜。消しゴム貸してえ？」

「…いいよ。はい。」

「サンキュー。」

クスクス…

クスクス…

「あのさ、修正テープ貸して？」

「…はいよ。」

ククク…

クスクス…

み…か…。

アナタガヤツテイタノ？

アンナニ…ヤサシク…コエヲカケテ…

ソナナコト…

シテタノネ…？

1 - 5 : 理由

私は絶句したのち、一目散に店から飛び出した。後ろを振り向かず
に…

ひどい…

ひどいひどい…

ひどいひどいひどい！！！！

美佳はずっと友達だつて…そう思ってたのに…！

私は、走った。走って、走って、美佳の家まで走った。

ピンポン…ピンポン…

「はい。」 ガチャガチャ

「！香菜子じゃん。どうしたの？」

「ハアハアハア…。か…えして…。」

「え？何？」

「返してよ！教科書も！消しゴムも！」

「な…何言つてんの？香菜子自分で無くしたんでしょ？人のせいに
しないでよね。」

「嘘つき！もう…全部知ってるんだから！」

「え…。何それ。トイレ行く振りしてずっと見てたわけ？感じわる
…。」

「それは美佳じゃん！他の人と悪口言つて…最悪だよ！」

「…香菜子だよ…。最悪なのは！」

「はあ？何言つてんの？」

「香菜子がいつもあたしといたのに、このごろどんどん離れていっちゃうからいけないんだ！！！」

「何言ってるの？あたしが言いたいのはね……」

「だから、隠したの……。寂しかった……。それに気づいて欲しかった……。」

「美佳……。だからって……。」

「悪いって思ってた……。けど……。美佳に気持ち知ってほしかったんだもん……。」

そう言くと、香菜子は泣き出した。

「美佳……。ねえ……。なんかごめんね。美佳がそんな気持ちだなんて知らなかったから……。言ってくればよかったのに……。」

「……言えなつ、かつ……。たんだもん……。」「うん……とりあえず、教科書とか持ってきてよ……。」

「……わかった……。」

香菜子は家に入って行った。

香菜子はどんな気持ちで最近私の事を見ていたんだろうか……。？
寂しいって気持ちを押し込めて……。私を見ていたんだろうか……。？
気づかれないように私の前では笑っていたんだろうか……。？
気づいて欲しくて隠して、隠して見つけてほしかったのね……。

ガチャ……

「これ……。本当にごめん……。」

「うん……。私……。私も、香菜子に対して少しこのごろ冷たかった……。だから、ごめんね。」

「ううん……。」

そして、二人は少し笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914c/>

忘れモノ屋

2010年10月15日02時17分発行